

〈はじめに〉 人間力を取り戻す「気」

未知の世界に目を向ける

現在私は、主宰する道塾や空手実践塾、学校講演などの宇城塾において、人間誰もが生まれながら持つ潜在能力を、独自の「気」という方法を使って、気づかせ開花させる指導を展開しています。そこで実践、実証している数々の潜在能力は、現在の常識や、たとえ最先端の科学をもってしても到底説明が及ぶようなものではありません。それほど人間というのは未知の凄い力を秘めていることが分かります。

そもそも我々人間が存在している地球そして宇宙は、95%が未知の世界と言われており、その未知の世界にある多くの解明できない神秘を目の当たりにしながらも、我々人間は現実として、分かっている5%の世界でものを見、考え、そこから抜け出すことができないうです。しかし、「人間というのはこの地球上で考えられる最も優れた生命体として、母なる地球に生を受け、存在しているのだ」という視点に立つと、我々はその潜在能力を1%

も出し切れていない事に気づけるのではないかと思えます。

その事は、「気」というエネルギーによって常識では不可能と思われる事が瞬時に可能になるという不思議な現実からも、しかもその力が桁違いである事からも言えると思えます。さらに、その「気」による不可を可とする実践事例には、客観性、普遍性、再現性があり、少なくともその潜在能力は万人共通の法則として内在するものであると言えます。

95%が未知の世界にあつて、残りの5%のなかの、さらにその1%にも満たない世界に自分たちがいるのだという謙虚な考えや見方に立てば、宇宙の大きなエネルギーに包まれ、生かされている自分の時空を感じ、常に一生を充実したものにできるのではないかと思つていきます。

逆に5%の世界に身を置けば、科学による新発見がいかにも未知の世界を解き明かす正しい答えであるという知識偏重主義に陥るため、「気」によって不可が可になるような現科学で解明できない潜在能力の事例は、疑心暗鬼ということになります。すなわち、部分分析に偏り全体を意識しない今の科学のあり方は、人間力の低下につながりかねないのです。そしてそれは、自らの器でしかものを見ることができないという事でもあります。

この偉大なる地球に生かされているという神秘を分母として、今を生きている自分を分子とすると、この「気」というエネルギーは、必ずや自分という分子をより大きくする力になるであろうと思えます。そう願つて、そこへの「気づき、気づかせる」が、まさに当塾の理念でもあります。つまり「人間は素晴らしいぞ、凄いぞ」という事を身体を通してまず知るといふ事です。実際、身体を通して得た情報は、知識で得た情報とはその情報量の桁が違い、自らに必ず変化を起こします。すなわち気づきです。そこで得た「人間を信じる」は、「自分を信じる」の自信となり、その自信はまた、他尊という利他の行動に結びついていくと信じています。

事実を最優先とする

私はあらゆる事において「事実」を最優先してきました。それは知識で得る情報と事実から得る情報とでは、その情報量の桁が違うことに加え、事実から得た情報は、そのプロセスが知性と違って感性にあるので、自然と自分の行動につながるからです。

教科書や本の情報は、知識として頭にインプットされますが、事実は、「身体を通して」、一つは頭脳に、もう一つは身体脳にインプットされていきます。

身体脳とは持論の言葉であります、分かりやすく言えば、自転車に一度乗れるようになることと一生乗ることができる、といった記憶を司る脳のことです。ですから身体脳は、体験という事実を通してしか創造されない脳とも言えます。

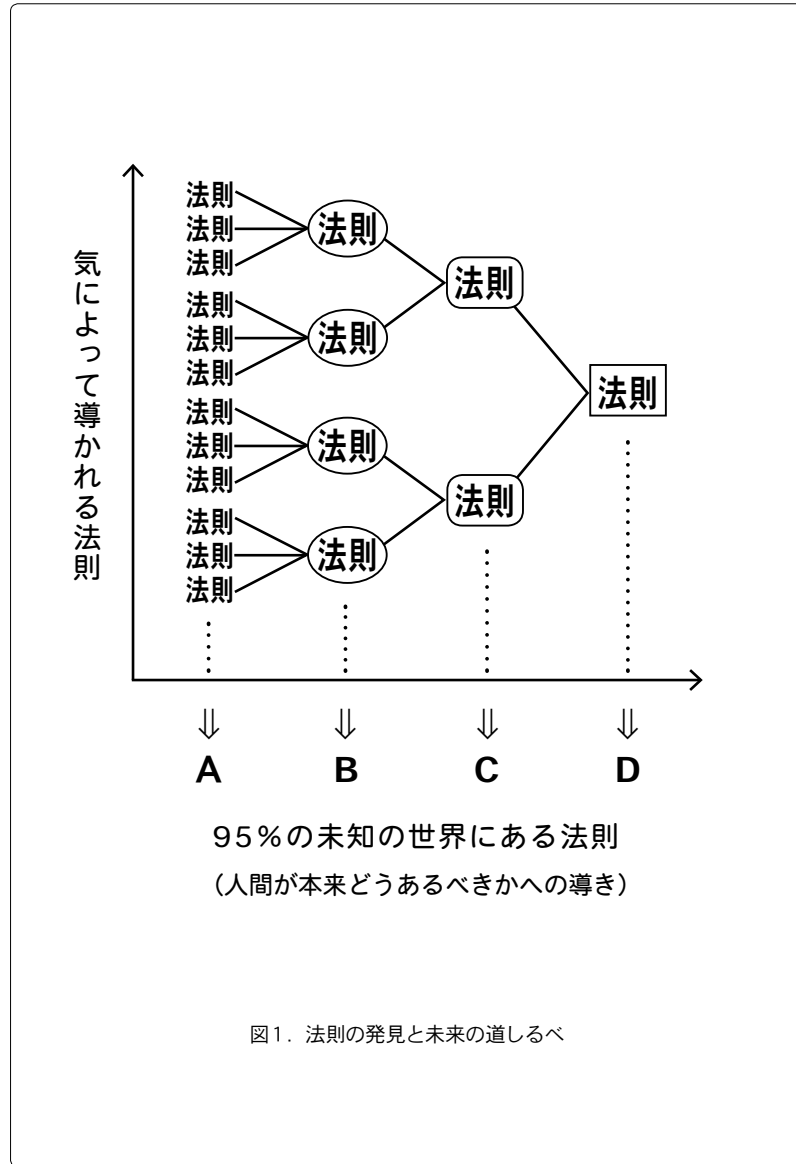
ルバングのジャングルで30年間生き続けてこられた小野田寛郎ひろおさんとは、過去、NHKの国際放送と季刊『道』どう（どう出版）で対談させていただきました。私が最優先する事実とは、小野田さんが30年間ジャングルで生き抜かれたという事実です。そこにある話は、全て体験に基づく事実だからこそ、本や教科書で得られる知識とはまったく異なります。戦争に行く前、ご自身がルバングに30年もいることになる事については未知だったにもかかわらず、実際小野田さんが生き抜かれたという事実、その生き抜くことができた根源にある生命力の本質とは何か――。それを自分の全身を通して感じ取ることができれば、貴重な教えとして生きてくるものだと思います。

たとえ自分自身がジャングルで過ごしたという事実はなくとも、小野田さんの体験を身体を通す聞き方をして初めて、それは擬似といえども自分の体験となるからです。しかし、このような身体を通しての聞き方ができるかどうかは、自分のなかに事実、体験を通した

身体脳をいかに多く持つているかにも関係してきます。

一方そうした体験を通した身体脳の学びとは真逆にあるのが、身近な例では、我々が中学校から習う英語の学習方法です。単語、文法、解釈など、中学、高校そして大学まで10年近く学び、試験ではたとえ100点をとったとしても、最も必要な会話というコミュニケーションはほとんどできないようにならないという不思議さです。赤ちゃんは、放つておいても1歳を過ぎる頃から自然と言葉を覚え、しゃべるようになります。不思議ですが、このほうが自然体なのです。しかし我々が学校で学んだ英語は、場合によっては話せないようにしてしまいます。まさしく目的と手段が混乱した、「試験、受験のため」を根底とする英語教育授業の矛盾と言わざるを得ません。

人間には、その身体の60兆個の細胞に、人間が人間として本来どうあるべきか、すなわち地球の創造物としてこの地球上でどう生きていくべきかが刻まれているはずで、まさに「気」というのはその刻まれたメッセージを読み解き、エネルギーにしてくれる本質的なものだと思います。「気」によってそれまで不可能だった事が瞬時に可能になるという事実は、我々に二つの事を教えてくれています。一つは、自分のなかに存在する未知な



- ① 「気」を相手にかけることによって相手にも同じ事を、かつ瞬時にさせることができる事。
 - ② 常識では不可能と思われるような事を瞬時に可能にできる事。
 - ③ その対象は、一人に限らず50名でも100名でも1000名でも、全員同時かつ瞬時に
- る潜在能力の発掘であり気づきです。もう一つは、その発掘された潜在エネルギーと現在の常識とされているエネルギーとの差異には著しい開きがあり、それを生み出すプロセスも従来のあり方とは矛盾しているという点です。従来のあり方とはすなわち人間の可能性を閉じ込めるあり方と言えます。
- これに対し現在、宇城塾で展開している「気」は人間の可能性を引き出すものであり、それは「事実・実践」を通して身体脳で「見る・聞く」という習慣と、長年かかわってきた技術開発や経営という実社会での生き様、そして武術としての空手と居合、これら全てが融合され、そこから見出し出した「全ての根源は調和にある」ということへの気づき、まさにこれこそが気の創造につながっていったと思っています。
- この自分のなかで「無から有」として存在している「気」によって導かれる最大の特徴は、

可能にできる事。

④ そこには普遍性、再現性、客観性があるという事。

この①②③④によつて導かれた多くの事象は、従来の科学が部分分析型である事に對し、常に統一体として、それぞれ普遍性、再現性、客観性という科学性を持ち、我々人間が本来どうあるべきかを導く法則とも言えます。さらにそれらの法則を掘り下げていくと、ステップA、B、C、Dという具合に集約されていき、それが集約されればされるほど、自分という存在と進むべき道が見えてくる。まさに世界にただ一つの自分の花を咲かせる事につながるのではないかと思います。世の中で奇跡とされていたような事も決して不思議な事ではなく、未知の世界にあるその人の潜在エネルギーの結果として結びついていきます。

すなわち、それは奇跡ではなく、人間に与えられた潜在能力そのものだという事です。まさにそれは、それぞれの個が居合わせた、自分と宇宙の時空の調和・融合によつて与えられているエネルギーであり、60兆個の細胞に刻まれたそれぞれの個に存在するメッセーヂと合致した時に発揮される潜在能力とも言えます。そう考えざるを得ないのは、人間は地球の創造物であり、限られた時間しか生きられない寿命という時間を有するからです。

そしてその本質に最も迫るのは「氣」というエネルギーによつて瞬時にその人にとっての不可能が可能になるという事実です。

人は、自分が持つ器の大きさでしか能力を発揮できません。すなわち、横着や知識偏重によつてつくられた器と謙虚さや未知の世界に對し畏敬の念を持つて生きている人の器とでは、人間としての桁が違うという事です。後者の器こそが、生かされている存在として潜在能力への気づきへとつながり、未知に對するスピード、すなわち未来に對しての歩みを加速させ、人間として充実感に満ちた人生につながるのではないかと感じています。

対立のない調和の時空をつくり出す氣

器の小ささは対立を生みます。器を小さくしているその要因の一つが、まさに現在主流となつている知識偏重主義であり、人間としての横着さや無関心などです。これらはとくに文明が生み出したものとも言えます。地球があるからこそ、我々は存在しています。今年（2013年1月）訪れた、12世紀に隆盛を極めたと言われるカンボジアのアンコール・ワットには、遺跡そのものの偉大さにも大変感動しましたが、それ以上に、当時の人間の

次元の高さに驚きました。それは、カンボジアの世界遺産アンコール・ワットの壁画についての解釈説明によく現われていました。以下にその内容を紹介します。まさに人類がどうあるべきかを示す警鐘的内容であると思います。

〈アンコール・ワット壁画の教えより〉

アンコール・ワットの第一廻廊に多く表現された主題、戦争の場面は、この人間界での人間に備わる両面性を説く。すなわち、人間には善性と悪性がある。善性とは神的デーヴァ的人間の性格を言い、一方、悪性とは悪魔（魔族）的、アスラ的人間の性格をさす。この両者は共に永遠に人間界に共存する。そのアスラ的人間は三悪たる色慾、憤怒、貪婪でもって、デーヴァ的人間及びアスラ的人間に対戦し、戦争を引き起こす。これは人間の外面の現象であり、今後もこの地球で生じる悲惨さと破滅である。

この外面の現象——たとえば戦争をくい止める方法は、各人の内面に委ねられている。いいかえると、各人の内面にある心の選択によって、善人とも悪人ともなる。人間は本来、善であるが、それを覆う心が先の二種を生みだし、ある時は善人となり、



ある時は悪人と化す。そこで、このあいまいなる心を調節、抑制する事が大切である。すなわち、意識を善性——愛に向ける事が常に大切である。それと同時に、善性に反する悪面に直面したら、常に対戦せねばならない。この悪性とは先に述べた三悪の事だが、簡単に言うなら、人間がもつ嫌悪感、憎みである。

一般人間の各人の心の中には、この両面性を常にもつ故に、各人は先の悪性アスラ的性格に対戦せねばならない。それは外面に現われた戦争行為では決してなく、心の中に生じた悪意へ対戦せんとする戦いである。この心の修正、もしくは浄化せんとする対戦の大切さを、アンコール・ワットの大壁画はヒンドゥー教神話にある戦争場面を通じて、主に

説いていたのであろう。

いいかえると、「人生は戦いである」というのは名言であり、戦いとは各人の内面について説いているのである。決して外的な現象——戦争行為を推奨したものではない。壁面の浮彫壁画は一見するに、そのような戦争を想起させるが、それは壁面を見る各人が、意を浄め、意識を神に向けて、善（慈愛）業をなせ、と説いた造型表現である。そうであれば、この世の人間には常に幸運と繁栄とがあると教え、またそれに反する逆の三悪に支配される者は、衰退、破滅があると説く。壁画は常に平安を希求している。実にアンコール・ワット芸術は、偉大なカンボジアの文化遺産である。

（『アンコールワットの彫刻』伊東照司著 雄山閣）

「気」とはまさに、この人間としての内面の戦いにおいて、善性に向かわせるエネルギーだと言えます。すなわち調和であり、愛であり、利他の行動です。

また、相手に気を送ると相手が一瞬にして同じ事ができるようになるという実践検証からも、それは人間誰もが持っているエネルギーである事がはつきりしています。

「気」のエネルギー、「気」の存在がいかに素晴らしいものであるかは、本書で実証している事例からも、その一端を感じていただけないかと思いますが、その究極にあるものは、人に対して、自然に対して、あるいは自分自身に対しての「調和力」です。すなわち、対立や衝突や争いのない時空を創り出す力です。それは愛であり、思いやりであり、利他の行動であり、共存共栄であり、平和です。

まさに、その争いのない平和へのプロセスと、そこに向かう気づきと、内なる戦いを「気」は教えてくれていると言えます。

この事がもしかすると、よくなされる、「気はどうしたらできるようになるのですか」という質問の答えかも知れません。

2013年5月吉日

宇城憲治

第一章

気と統一体——人間力開花の本質



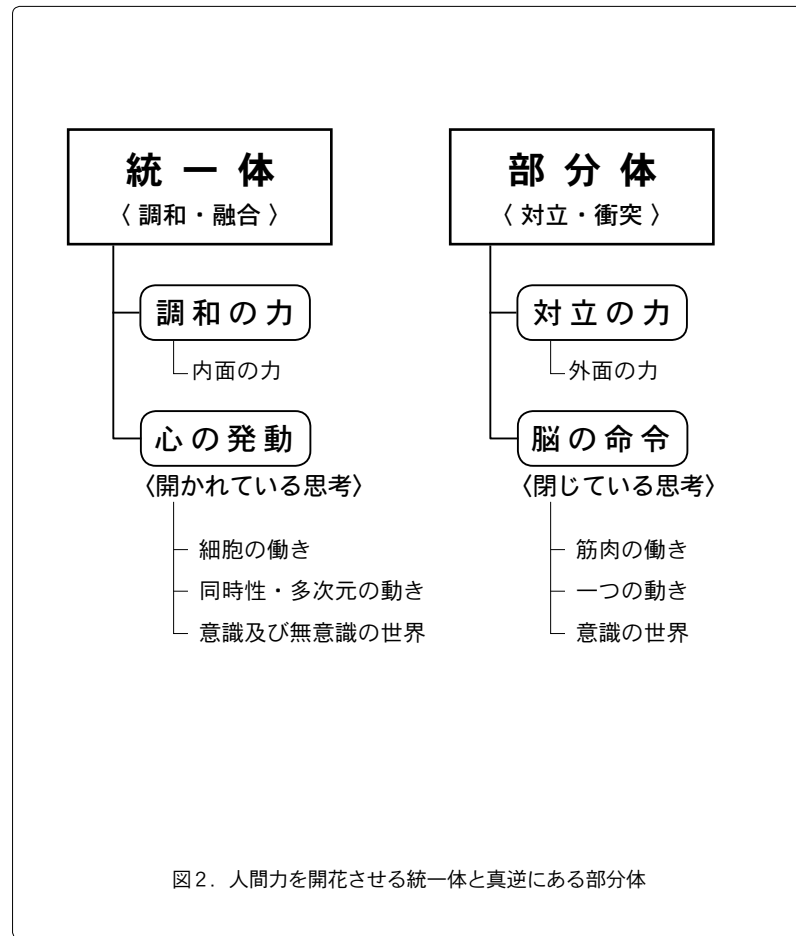
サンチンの型

人間にとって思考の基本となる教育、そして身体の基本となる体育、そして人間としてのあり方としての道徳は、我々個人にとって重要な要素であります。とくに、小学校、中学校、高校の教育、体育、道徳は、子供たちの将来に、ひいては日本の将来に大きな影響を与えるものである事は間違いありません。しかしながら、それらの内容は、ときに人間に備わっている本来の能力を引き出すに至らない場合があります。とくに今の教育が、暗記を中心とした詰め込み型知識偏重にある事、またスポーツにおいては西洋型の筋力主体、すなわち筋力トレーニングによる強化や勝敗主義を主体としている事、これらは全て本来の人間が持っている個の潜在能力を引き出すのではなく、逆に閉じ込め蓋をしているという事があるからです。その結果、現在、教育やスポーツの場において、大きな矛盾と課題が顕在化してきています。

それらの課題の根源にあるものは、その本質が全て分析を主体とした部分体の捉え方となつていているという点です。すなわち生命体として本来「ひとつ」として捉えられるべき人間を、部分を統合した全体として捉えているのです。そのあり方は、たとえ部分的には正しいと考えられても、全体として見た時は、大きな間違いである事が多々あるのです。例えば、ロボットであれば、部分体の集合ですから部分の誤りは即全体の誤りとして、いろいろな形でその現象が現われるので、その誤りの箇所を直していく作業ですみます。しかし生命体としての人間は、たとえ部分的には良いとされ、しかし全体から見ると非合理的な分析知識の方法でも、生命体としての人間の身体構造がそれらを補正して、全体としてはまともにも動く事ができるといふ、ロボットとは桁違いな仕組みとなつていて、そこに部分分析の課題点が見えてきません。この矛盾はいろいろな方法で検証できます。もつとも我々人間が生まれるまでの仕組みを見れば、その矛盾は容易に理解できることです。

我々はお母さんのお腹で受精し、1ミリにも満たない受精卵が細胞分裂を繰り返して、わずか10カ月の間に構造上完成形の人間となつて生まれてきますが、その仕組みからして、部分の集合体であるロボットのようなあり方は絶対にあり得ないのです。それは、人間は最初から生命体として、すなわち統一体として存在しているからです。ですから、部分分析のあり方を人間に適用する事自体、人間の潜在能力を発揮できなくさせる要因ともなつていふのです。

こうした部分分析へ向かう課題の答えとして、現在私は、人間誰もが本来持っている潜



在能力を独自開発の「気」による方法で引き出し、これまでの常識ではあり得なかつた身体の変化、発展を体験してもらい、まず現状の自分への問いかけをしてもらっています。すなわち自らの「気づき」です。

この気による一瞬の変化とは、自分のなかに気によって「できる自分」と今の「できない自分」が同時に存在するという矛盾の体験とも言えますが、決してそれは矛盾ではなく、本来「できる自分」のほうが正解なのです。逆に言えば、今の自分のなかに「できない自分」をつくってきた環境や要因があるという事です。あとで詳しく述べますが、「できる自分」とは「統一体」の事であり、「できない自分」とは「部分体」という事です。

この「統一体」と「部分体」という事は、何も身体動作だけではなく、思考においても同じことが言えます。すなわち、開かれている思考、心は調和・融合として統一体につながり、閉じている思考、心は対立・衝突として部分体につながっていくという事です。それほどこの「統一体」と「部分体」の位置づけには大きな差があります。

「統一体」とは、人間が本来あるべき姿のことを言い、大きく言えば、地球上の生命体として全ての共存共栄に向かう「調和する身体」のことを言います。すなわち地球の創造生

命体として生かされている存在であるという事です。それは、全てを部分的に捉える部分分析型のあり方ではなく、60兆個の細胞からなる生命体としての人間であると捉えるあり方です。

人は誰でも母親の胎内で受精し生命を得て、その受精卵から細胞分裂を繰り返すなかで、目や耳、口、手、足、内臓など人間にとって必要なものを形造っていきます。それは、1ミリにも満たない、まさしくこれ以上分けようのない一つの受精卵という無から有としての生命です。すなわち人間は10カ月後には60兆個の細胞を持った生命体として完成していく「ひとつ」の「統一体」であるという事です。

人間力と心

「人間力」とは、ひと言で言えば「心あり」に比例していると言えます。

すなわち「心のあり方」が人間力をコントロールしていると言ってもいいと思います。

その「心のあり方」の重要性は、戦国時代、江戸時代、幕末の、武術の究極において、その絶対の条件として説かれています。心に刃を乗せて「忍（しのぶ）」と書くように、「戦

わずして勝つ」、すなわち、斬る刀を抜かずして勝つという境地まで極めた無刀流（明治時代初期に山岡鉄舟が開いた剣術流派）の極意は、武術の究極、すなわち人間の究極を極めていったそのシステムとともに、その究極にあるものが何かを教えてください。刀を腰に差すという状況そのものがすでに、生と死を常に無意識にも意識せざるを得なかったからこそ、人間としての究極のあり方が必然的に見えてきたのではないかと思います。戦国時代から江戸初期にかけての剣客・伊藤一刀齋の極意書の最後に記された言葉、「究極は『真心』である」は、まさに心のあり方を示しています。

真心が死語になりつつある今に照らし合わせてみると、人間力の低下や墮落も理解できると思います。だからこそ「刀を腰に差せ！ それだけの覚悟を持て」という事です。

人間が生きられる寿命は平均的に80年。40億年という地球の年月からすれば、点にもならないような時間の人生。有限時間の人生を平和で幸せに生きるという事、すなわちこの母なる地球上で共存共栄かつ、利他の行動に向かってこそ、意義ある人生であり、人間の成長ではないかと思えます。